

九月に入って、那覇市内の画廊が一段とにぎわってきた。先週などは、長老の絵画展、中堅作家の現代美術展、写真や工芸の個展ありで、一気に美術シーズン突入の感じである。火曜日

の夜に開かれるオーブニングパーティーは、どの画廊も美術家や、美術ファンで大にぎわい。ある美術家の先生は、市内

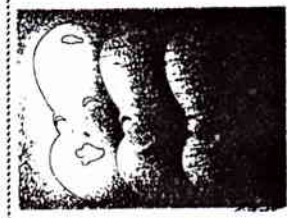
数カ所の画廊を、行ったり来たり飲み往來の体、シチグッチ・ソーグッチの親せきまわり(？)のよつむな忙しんであった。今のところ、那覇市内には画廊やギャラリーが、公の施設を

含めて、約十五軒もある。五、六年前の数軒しかなかった時代を思うと、ドッと美術の波が襲って来て、ピンからキリまで(？)百花りよう乱、美術展の花盛りと言えなくもない。住宅

唐獅子

美術シーズン

上原 誠 勇



カット・大久保彰

事情が良くなり、生活の安定度や時代の中のカルチャーブームが底流にあると考えられるが、美術が日常化し、より市民一般の生活の中に入り込んで来た証と受け取れる。

に掛かる。もし沖繩に本格的な美術の時代が到来するとするならば、今の状況はちょうどその入り口にさし掛かっているのかも知れない。しかしその時代が来るため

には、まず美術の研究家や評論家の本腰を入れた研究と評論活動が大きな力キを握っており、必要不可欠と言える。

絵を描けば誰でも個展が出来る時代、個展をすれば画家と呼ばれる時代、先生、ばれ、先生、先生と呼ばれても不思議でないほど、一般化し、美術界は拡がりをを見せている。本物は何か？ 本物のアーティストは誰か、アーティストにピリットに満ちた本物の作品に評価を与える事が出来るのは、本気になった美術評論家以外な

と思うのだが。
(画廊沖繩代表)